「陸軍板橋火薬製造所跡」～新指定の国史跡～

明治期の板橋火薬製造所

陸軍板橋火薬製造所は、明治４年（1871）、兵部省が、江戸最大の大名屋敷であった加賀藩江戸下屋敷の一部の引渡しを受け、初めて新設した官営の西洋式火薬製造所です。

同９年の竣工時は砲兵本廠板橋属廠と呼称されていましたが、同 15 年に板橋火薬製造所と改称しています。開業当初は敷地内に流れる石神井川の水力を利用して、黒色火薬を製造していました。

また、明治 10 年にはかつて加賀藩江戸下屋敷庭園の築山であった辺りにおいて、検速儀を使った火薬試験射撃を行っています。これは、西洋式の測定技術が初めて火薬生産に導入されたことを示す重要な出来事です。

なお、明治 36 年になると、この火薬試験発射場の場所に火薬・爆薬の開発・改良の拠点となる、理工学系では日本で最初の研究所、「陸軍火薬研究所」が設置されています。

弾道管

昭和期の板橋製造所と周辺地域

火薬製造所は、昭和 15 年（1940）に東京第二陸軍造兵廠板橋製造所と改称されます。また、隣接した北区には、東京第一陸軍造兵廠と陸軍兵器廠が置かれており、当地域は全国最大規模の陸軍造兵関連施設が集中、展開する場所でした。加えて、近接する区内志村地域に多くの関係工場が進出するなど、火薬製造所の歴史そのものが東京北西部の工業・産業の発展を物語ります。

終戦後、火薬製造所の跡地には、産業経済上重要な野口研究所や理化学研究所などの研究所や大学・病院・工場が入居しました。このうち、理化学研究所には後にノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹・朝永振一郎両博士が物理研究室を置いており、当地が世界的な物理学研究の中心的な場となっていました。

現状と今後

史跡指定の範囲は、火薬製造所全体敷地、約 50 万㎡のうち、火薬研究所エリアの建造物や遺構が比較的良好な状態で保存されている約１万 2,500㎡であり、旧野口研究所、旧理化学研究所板橋分所、区立加賀公園の敷地部分に当たります。

史跡範囲の中には、明治 10 年以来の試験射撃のための射場や射垜（的）、爆発の広がりを防ぐ土塁、燃焼実験室や弾道管、銃器庫や貯蔵庫、爆薬製造実験室などが点在し、火薬を造る上で必要な研究・実験・製造・貯蔵という一連の工程を示す遺構が残ります。

当史跡は、明治期から昭和期にかけての陸軍による火薬製造の発展を理解することができ、これらの近代化遺産を都市部において保存することができる貴重な場所です。

陸軍板橋火薬製造所は、平成 29 年６月 16 日に開かれた文化審議会（文部科学省）により、国の史跡に指定するよう答申がなされました。近日中に行われる官報告示を経て、国史跡に指定される予定です。

今後は、板橋区史跡公園（仮称）整備構想委員会による基本構想・計画をもとに保存整備利活用計画を策定し、国の史跡にふさわしい史跡公園として整備を行っていきます。

旧理化学研究所板橋分所

旧湯川秀樹博士研究室内

陸軍板橋火薬製造所跡

所在地：東京都板橋区加賀一丁目８番地
交　通：JR 埼京線「板橋」駅・「十条」駅下車
　　徒歩 10～15 分
　　都営三田線「新板橋」駅・「板橋区役所前」駅下車
　　徒歩 10～15 分
問合せ：板橋区教育委員会
　　生涯学習課文化財係
　　電話：03-3579-2636

※現在は公園整備中です。史跡範囲となる区立加賀公園の部分は御覧になれます。

編集後記

今回は、本年３月、国宝に指定すると答申された「銅造釈迦如来倚像」について特集しました。10月から始まる「東京文化財ウィーク2017」にも参加していますので、是非現地に足を運び、実物を御覧ください。

その「東京文化財ウィーク」も今回で20回目の開催。1998年の第１回開催以来、文化財の所有者・管理者をはじめとする多くの方々の御理解と御協力の元、本年まで継続してきました。文化財に触れることのできる貴重な機会です。「東京文化財ウィーク2017」で東京の秋をお楽しみください。

平成 29 年９月 30 日
発行　東京都教育庁地域教育支援部管理課
〒163-8001　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話　03（5320）6862

R70
古紙パルプ配合率70％再生紙を使用しています
VEGETABLE OIL INK
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

平成29年（2017）9月30日
東京都教育庁地域教育支援部管理課
第123号

東京の文化財

目　次

東京文化財ウィークは、20回目の開催を迎えます！ ---- 1~3
銅造釈迦如来倚像　国宝指定 ---- 4~5
文化財を生かす（目黒区・小金井市） ---- 6~7
陸軍板橋火薬製造所跡～新指定の国史跡～ ---- 8

東京文化財ウィークは、平成10年（1998）に開始されました。
平成29年（2017）の今回は、20回目の開催を迎えます！

表紙画像 1998「江戸名所一覧双六」（江戸東京博物館）1999 旧朝香宮邸、「三世沢村宗十郎の大星由良之助」（太田記念美術館）2000「江戸名所図屏風」（出光美術館）、旧岩崎家住宅、東京水産大学雲鷹丸、旧近衛師団司令部庁舎、徳富蘆花旧宅、木造十一面観世音菩薩立像、旧東京音楽学校奏楽堂 2001 土製耳飾、旧古河氏庭園、武蔵名勝図会稿本、旧江戸城田安門 2002 徳富蘆花旧宅、国立天文台第一赤道儀室、江戸城造営関連資料・甲良家伝来、木造釈迦三尊及び五百羅漢等像 2003 旧寛永寺五重塔 2004 旧前田家本邸洋館 2005 大円寺石仏群 2006「東京名勝開化貢景新橋鉄道」（港郷土資料館）2007「東京名勝両国橋新築図」「江戸新大橋」（すみだ郷土文化資料館）、「浮絵高輪之図」「東都三圓山増上寺図」（港郷土資料館）2008「大江戸鳥瞰図」「江戸名所一覧双六」「江戸絵図」（都立中央図書館）2009 目黒雅叙園百段階段、土製耳飾、木造普賢菩薩騎象像、旧渋沢家飛鳥山邸晩香廬、「紙本著色西王母図狩野春笑筆」（金剛院）、啓明学園北泉寮 2010 浅草寺二天門、日野宿脇本陣跡、上水記、駒木野遺跡26b号住居跡出土品、蓮華形磬、旧前田家本邸洋館 2011 木造普賢菩薩騎象像、アカガシラカラズバト、小笠原南島の沈水カルスト地形、旧三岡家長屋門、江戸城造営関連資料・甲良家伝来、「紙本著色観心十界図」（円福寺）、柴又八幡神社古墳出土埴輪、旧前田家本邸和館 2012 東京駅丸ノ内本屋、オジロワシ、「紙本著色西王母図狩野春笑筆」（金剛院）、三頭大滝 2013 桜田二重櫓、旧前田家本邸 2014 大國魂神社、浅草寺雷門 2015 国立西洋美術館、「江戸名所高輪廿六夜」（江戸東京博物館）2016 国立西洋美術館、「青梅鉄道沿線名所図絵」（青梅郷土博物館）

東京文化財ウィークガイドブック表紙▶

東京文化財ウィークの始まり

文化財保護法は、「文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献すること」を目的としており、保存と活用は文化財保護の重要な柱と位置付けられています。

東京文化財ウィークを開始する頃、当時の社会状況は、文化財に寄せる関心の高まりとともに、文化財の保存と活用の在り方について様々な検討がされるようになっていました。

このような中、東京の文化財をより多くの方に見ていただくことにより、地域における文化財の「保護」と「活用」について考えるきっかけとし、同時に区市町村等との連携を強化することを目的として、平成 10 年（1998）、東京文化財ウィークは始まりました。

そもそも東京文化財ウィークって何？

東京文化財ウィークは、より多くの方に文化財に触れ、親しんでいただく機会を提供する事業です。東京都内各地にある文化財を一斉に公開する「都内文化財一斉公開事業」と、文化財に関連した文化財巡り、展示等を開催する「文化財関連企画事業」があり、国の「文化財保護強調週間」に合わせて集中的に行っています。

公開している文化財や企画事業の一覧は、９月下旬に配布予定の文化財ウィークのガイドブックやホームページに掲載しています。また、特集冊子として、「小石川・雑司が谷を歩いてみませんか」「北多摩を歩いてみませんか」も同時に配布する予定です。

現地では、文化財に関する解説カードも無料で配布しています。解説カードは現地等でしか手に入れることができませんので、ぜひ文化財を訪れて集めてください。ポストカードの形をしていますので、文化財を巡る旅の記念に、絵葉書としてもお使いいただけます（所定金額の切手を貼る必要があります。）。

東京文化財ウィークガイドブックについて

文化財ウィークに参加する公開文化財、企画事業の情報が全て掲載されたガイドブック（冊子）を発行します。ガイドブックは２種類ありますので、お取り忘れのないようお気を付けください。

【通年公開編】 ※年間を通じて使用できます。

通年公開編では、一年を通じて公開している文化財を紹介しています。また、巻頭特集として、今年 20 回目の開催となる東京文化財ウィークの始まりの経緯と、過去のガイドブックの表紙ギャラリーを掲載しています。

【特別公開・企画事業編】

※特別公開は平成 29 年 10 月 28 日（土）～ 11 月 5 日（日）、企画事業は平成 29 年 10 月 1 日（日）～ 11 月 30 日（木） 限定になります。

特別公開編では、文化財ウィーク期間に限って公開する文化財を紹介しています。企画事業編では、10 月 11 月に各区市町村教育委員会をはじめとした団体による文化財に係るイベント等を掲載しています。また、東京９区による文化財古民家巡り事業など、連携事業も掲載しています。

＊年間の公開情報については平成 29 年８月現在の情報になります。最新の情報については改めて御確認の上、お出掛けください。

ガイドブックはどこで手に入りますか？

ガイドブックは、都庁内の観光案内所や、区市町村教育委員会の文化財担当の窓口、区市町村立郷土博物館、ガイドステーションを中心に都内各地で無料配布しています。在庫がない場合もございますので、お問い合わせの上、配布窓口までお出掛けください。

ガイドステーション

区市町村立の郷土博物館を中心にガイドステーションが設置され、企画事業などの情報提供やガイドブックの配布を行いますので、是非御利用ください（ガイドステーションの設置場所はガイドブックに掲載予定です。）。

【ガイドステーションの例】

- 目黒区めぐろ歴史資料館
- 調布市郷土博物館
- 東村山駅西口サンパルネ観光案内所
- 板橋区郷土資料館
- 小金井市文化財センター
- 東京都立多摩図書館　など、多数

特集記事

文化財ウィークに併せて、昨年度に引き続き区部と多摩部で文化財巡りの特集冊子を作成しました。こちらは、文化財ウィーク期間に限らず、一年を通じて文化財巡りを楽しめるコースとなっています。

また、英語版も作成しています。バックナンバーも引き続き配布していますので、都内各地の文化財巡りをお楽しみください。

～小石川・雑司が谷を歩いてみませんか～

小石川・雑司が谷は、起伏の多い土地です。幕府ゆかりの寺院や、寺院に通じる通りに沿って門前町が形成された小石川は、第五代将軍綱吉とゆかりの深い地域でもあります。また、雑司ヶ谷鬼子母神は、鬼子母神信仰が幅広く浸透した江戸時代には、大いに盛況を呈していました。

今回は、江戸時代を感じる護国寺や雑司ヶ谷鬼子母神堂などの文化財のほか、旧マッケーレブ邸や自由学園明日館などの明治・大正時代の文化財を巡ります。

江戸時代の人々と同じように、坂を上り下りしながら、往時の小石川・雑司が谷に思いを馳せ、東京の地形や歴史を体感してください。

～北多摩を歩いてみませんか～

今回のコースは、交通の要所として様々な文化財が点在している東村山市と、そこから東方向へ通じる街道などに点在する清瀬市や東久留米市の文化財を巡ります。新田義貞ゆかりの文化財である久米川古戦場跡や板碑、また国宝の正福寺地蔵堂など鎌倉時代を感じる文化財のほか、縄文時代や弥生時代の遺跡にも触れることができます。

北多摩の歴史を感じながら、文化財巡りをお楽しみください。

※特集冊子は日英２か国語対応です。

※バックナンバーは都庁内観光案内所、各地域の区市町村教育委員会や観光案内所、東京シティアイ（東京駅直結ＪＰタワーＫＩＴＴＥ）等で配布しています。在庫がない場合もございますので、お問い合わせの上、お出掛けください。

★主なバックナンバー★

「府中・国分寺を歩いてみませんか」
「白金高輪を歩いてみませんか」
「新選組ゆかりの地を歩いてみませんか」
「千駄木・谷中界隈を歩いてみませんか」
「中世の多摩を歩いてみませんか」

特別企画

【ボランティアガイドによる特別ガイド@旧前田家本邸和館】

重要文化財旧前田家本邸の和館を、ボランティアガイドが解説をして案内するツアーを行います。通常のガイドでは案内することのない庭園を文化財ウィークに併せて特別にガイドします。※洋館は修理工事中のため、見学できません。

【パネル展】

加賀百万石の城下町である金沢の礎を築いた前田家の利家、利長、利常の３代にスポットを当て、加賀藩の歴史を紐解くパネル展を、旧前田家本邸和館で開催します。

【視覚・聴覚障害者社会教養講座】

今年も視覚・聴覚障害者社会教養講座を開催します。

・晴眼者とともに学ぶ視覚障害者教養講座
　国立天文台で文化の秋を満喫
　　～国立天文台内の文化財見学と、
　　秋の夜空についての講演を通して文化に触れる～
・聴覚障害者社会教養講座
　江戸東京たてもの園での文化体験
　　～園内の文化財見学、レクチャーを通して文化に触れる～

詳細はガイドブックの特別公開・企画事業編 29 ページを御覧ください。

見学に当たってのお願い！

文化財は、私たちの大切な宝物であり、そして後世に受け継いでいくべき財産です。文化財を見学するときはマナーを守って御鑑賞ください。ガイドブックには各文化財の施設情報が載っています。撮影禁止の場所もありますので、ガイドブックや現地の指示に従ってください。

お問合せ先　東京都教育庁地域教育支援部管理課文化財保護担当　電話　０３－５３２０－６８６２

深大寺《銅造釈迦如来倚像》

▶深大寺《銅造釈迦如来倚像》国宝指定

《銅造釈迦如来倚像》（7 世紀後半～ 8 世紀初頭）は像高 83.9㎝の銅で造られた仏像です。台座に腰を掛け、穏やかな微笑をたたえた青年を思わせる清冽な釈迦の姿をあらわしています。

平成 29 年 3 月、国の文化審議会は文部科学大臣の諮問に対し、調布市の深大寺に伝わる《銅造釈迦如来倚像》を国宝（美術工芸品・彫刻）に指定することを答申しました。今後、国の官報告示をもって正式に指定されます。

本像は大正 2 年（1913）に古社寺保存法により国宝（旧国宝）に指定され、関東に比類のない古仏として知られてきましたが、昭和 25 年 8 月に施行された文化財保護法によってそれまでの国宝が全て重要文化財になった際に、重要文化財となりました。

近年は数々の展覧会に出陳され、多くの人々から東京の地で長い歴史を刻んできた麗しい仏像として注目を集めました。また、科学的調査により白鳳期の仏像の研究が進む中で改めてその重要性及び稀少性が認められ、このたび国宝に指定されることとなりました。

現在、国宝に指定されている彫刻は 131 件ありますが、東日本にあるものはわずかに 5 件（平成 29 年 9 月 1 日現在）。東京都内の仏像としては、港区の大倉集古館が所蔵する《木造普賢菩薩騎象像》（平安時代）に続き 2 例目で、寺院に伝来した仏像では初めての国宝指定です。

銅造釈迦如来倚像

銅造釈迦如来倚像

▶《銅造釈迦如来倚像》の特徴

頭部は螺髪をあらわさず、鑿痕を残しています。ふっくらと張った頬と鼻梁からのびやかな弧を描く眉、わずかに口角を上げて微笑む朗らかな子供のような表情に、白鳳仏の特徴を見ることができます。上半身には衲衣、下半身には裙という衣を着けています。衣文線の流麗な美しさに対して体躯はなだらかに起伏し、形式的な表現と写実的な表現が見事に融合した本像は日本の仏像の中でも屈指の美を誇っています。左手肘は与願印を、右手は施無畏印をあらわします。手の造形に注目してみると、柔らかくふくらんだ掌から少し短めの指が伸び、指先をわずかに反らす形をしています。このような手の造形も白鳳仏に多く見られるものです。

本像は台座に両膝を開いて腰掛ける珍しい姿をしています。この姿は倚像と呼ばれ、中国で 5 世紀頃に盛行した形式です。朝鮮半島を経て白鳳時代（7 世紀後半～ 710）にこの形式が日本に伝来したと考えられます。奈良県の橘寺や川原寺から出土した塼仏や押出仏、東京国立博物館法隆寺献納宝物一四四号《銅造阿弥陀如来三尊像》の中尊（山田殿像）、法隆寺五重塔初層南面《塑造弥勒仏像》など、7 世紀後半から 8 世紀初めにかけて倚像が多く見られ、本像も同じ時期に制作されたものと考えられます。日本の彫刻史において白鳳仏と呼ばれるこの時期の仏像は、中国や朝鮮半島からの影響を考える上でも非常に重要なものです。

保存状態は右手の指先がわずかに失われている以外は極めて良く、造像当初の姿を今に伝えています。

本像は当時高価だった蜜蝋を用いて型を作り、その周りに土を盛って土型を作った後、熱で蝋を溶かして土を固め、蝋が溶けた部分に銅を流し入れる方法で鋳造されています。頭頂から足先までを含む全身を一度に鋳造することは難しく高度な技術力が必要でした。銅の厚みは 1 cm 程度で、像内は像底から頭部まで中空となっています。かつて表面には金色が施されていましたが、火災に見舞われた痕跡があり、現状はわずかに衣文に残るのみです。

顔の表現や衣文線などの作風は、奈良・法隆寺の国宝《観音菩薩立像》（夢違観音）や奈良・新薬師寺の重要文化財《銅造薬師如来立像》（香薬師）と類似しており、畿内にあった同じ工房で鋳造された可能性が指摘されています。

▶本像の来歴と再発見後の反響

深緑と湧き水に恵まれた武蔵野丘陵の古刹である浮岳山昌楽院深大寺は、天平 5 年（733）に満功上人により法相宗の寺院として開創されました。本像の造像はこの開創よりさらに半世紀ほどさかのぼります。この像がどのような経緯で深大寺にもたらされたかはまだよく分かっていませんが、深大寺創建時の本尊として迎えられたと考えるのが自然です。貞観年間（859-877）に天台宗に改宗して以降は、元三大師を奉安する関東随一の密教寺院として中世・近世を通じて隆盛しました。

現存するこの像に関する最も古い記録としては、天保 12 年（1841）にまとめられた『分限帳』であり、それによると当時は本堂の脇仏として安置されていたことが記されています。ところが不思議なことに、深大寺の縁起だけでなく江戸時代以前の地誌や名所案内などにも、全くこの像についての記述は残されていません。

慶応元年（1865）には火災により、深大寺の諸堂の大半が焼失します。その後、本像は慶応 3 年に再建された元三大師堂の須弥壇下に仮安置されたらしく、明治 28 年（1895）の『深大寺創立以来現存取調書』の宝物の条には、「一．釈迦銅□壱軀　丈二尺余坐像ニ非ズ、立像ニ非ズ　右ハ古ヘ法相宗タリシ時ノ本尊ナリト申伝ナリ」とあり、坐像でも立像でもない本像のことを記していることが知られますが、いつしかその存在は人々の記憶から薄れていきました。その頃の寺の小僧で、後に深大寺で出家得度した日本野鳥の会創設者の中西悟堂（1895–1984）は「私ども小坊主どもは、よくハタキをかけてこの仏像の塵を払ったが、そのついでにハタキのけつでコツンと叩いたりしたのだから罰当たりな話である。たぶん深大寺全焼のあと、仏像什具の類の置きどころもないまま、まとめてそんなところに突っ込んだのであろうが、いわば余計物扱いであった」と往時を回想しています。

深大寺本堂

明治 42 年、鎌倉時代の《梵鐘》（国指定重要文化財（工芸））の調査のために友人たちと深大寺を訪れた当時東京帝国大学助手であった考古学者・柴田常恵（1877–1954）が偶然、須弥壇の奥に横たえられていた仏像に目を留め、白鳳期の仏像が関東にあるなどとは想像もしていなかった一同は大きな驚きに包まれたといいます。その後、東京帝室博物館（現・東京国立博物館）の鑑定を経て、再発見からわずか 4 年後に旧国宝に指定された本像は、東京の白鳳仏の優品として一躍有名になり多くの参拝者を集めるようになりました。当時、深大寺を訪れた詩人の北原白秋（1885–1942）はその清廉な姿を、

はてしらぬ　仏の笑まひ　面明る
灯映にして　み掌の欠けたる

と詠じています。

現在、本像は深大寺境内の釈迦堂に安置されています。平成 30 年（2018）3 月末日までは、奈良・新薬師寺薬師如来立像の模像と兵庫・鶴林寺聖観音立像の模像と共に拝観することができます。

銅造釈迦如来倚像
所 在 地：東京都調布市深大寺元町 5-15-1
アクセス：京王線「つつじヶ丘」駅又は「調布」駅からバス（深大寺行）終点下車徒歩 1 分

深大寺《銅造釈迦如来倚像》の厨子

本像が旧国宝に指定された後、深大寺の八十二世堯文は大正 4 年 (1915) に白木の厨子を新たに作り、本像を安置していましたが、江戸料理屋の八百善等から新しい厨子の寄進の申出があり、昭和 7 年 (1932)3 月にこの厨子が奉納されました。

厨子の作者である吉田包春 (1878-1951) は正倉院宝物の模造を数多く手掛けた漆芸家です。奈良時代の技法を復元、継承するばかりではなく、新しい漆芸を目指しました。

深大寺の《銅造釈迦如来倚像厨子》は総高 150㎝、宝相華文や鳳凰など奈良時代の技法を用いて描かれた厨子本体と台座、前机などがセットになった作品です。本厨子は包春の代表作ともいえ、高度な技術力と格調の高い作風が評価され、平成 28 年に調布市有形文化財（工芸品）に指定されました。

銅造釈迦如来倚像厨子

目黒区総合庁舎
（旧千代田生命保険相互会社本社ビル）

村野藤吾による設計

本館と別館から成る目黒区総合庁舎は、目黒区役所の他、都税事務所や保健所などが入る複合施設で、連続する白い竪格子の外観が特徴的です。

目黒区総合庁舎の建物は、昭和 41 年（1966）に千代田生命保険相互会社の本社ビルとして建てられたもので、後に目黒区が取得し、平成 15 年（2003）から目黒区総合庁舎として使用しています。

目黒区総合庁舎は、文化財の指定・登録となっていないものの、設計は昭和を代表する建築家の一人である村野藤吾（1891 ～ 1984）によるものです。村野は大阪を拠点として全国に作品を残していますが、代表作の一つの広島にある世界平和記念聖堂（1953 年築）は、丹下健三設計の広島平和記念資料館（1955）と共に、平成 18 年（2006）に戦後建築として初の国指定重要文化財となっています。東京での仕事としては、高島屋東京店（重要文化財）の増築（1952）、日本生命日比谷ビル・日生劇場（1963）、旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮、国宝）の改修（1968）、新高輪プリンスホテル（現・グランドプリンスホテル新高輪）（1982）などがあります。

南口エントランスホール

和室と螺旋階段のある庁舎

目黒区総合庁舎の建物は、保険会社の本社ビルから役所へとコンバーション（用途変更）される際には、事務室のレイアウト変更等の改修工事を行っていますが、保険会社時代の建築意匠は各所に残されていて、現在も見ることができます。

茶室と茶庭

本館１階の西口玄関を入って中庭の池を見つつ進むと、和室「しじゅうからの間」（８畳）、「しいの間」（８畳）、「はぎの間」（３４畳）の３室があります。各室の名前は、目黒区総合庁舎になってから、区の鳥・木・花にちなんで名付けられました。また、はぎの間の隣には茶室が設けられていて、ビルの中にありながらこの一角は和の空間となっています。

螺旋階段

これらの和室や茶室は、保険会社時代には社員のクラブ活動に使用されていました。現在、しじゅうからの間は休憩室として開庁時間には一般開放され、その他は貸出施設（有料）として使用されています。

本館３階南口のエントランスホールは、天井が高く広々とした空間で、床と壁は白大理石張りです。天井にある８つの天窓の内側には、ガラスモザイクによって四季が表現され（作野貫平作）、ホールの奥には色ガラスブロックの袖壁（岩田藤七作）があります。

エントランスホールを抜けると左に、階段の魔術師ともいわれた村野の設計による螺旋階段が現れます。滑らかで優美な曲線階段が、２階から４階へと続いています。

開かれた庁舎として

目黒区総合庁舎は行政施設として機能していますが、建物自体の歴史と特徴を生かした活用も行われています。毎年春頃、目黒区美術館主催で建築ガイドツアーが実施され、大勢の方が参加されています。また、建物のなかでも特に象徴的な場所である、南口エントランスや螺旋階段を、結婚式やフォトウエディングの会場として貸し出すウェディング事業（有料）も行っています。

なお、一般開放部分は開庁時間内であれば見学いただけます。目黒区総合庁舎は今後も、保険会社時代からの建築的価値を引き継ぎつつ、開かれた庁舎として皆様をお迎えいたします。

目黒区総合庁舎
所 在 地：東京都目黒区上目黒 2-19-15
アクセス：東急東横線・東京メトロ日比谷線「中目黒」駅徒歩 5 分
問合せ先：目黒区教育委員会事務局生涯学習課文化財係
（電話：03-5722-9320）

小金井市サクラ並木

まちの発展はサクラの花見
史跡玉川上水と名勝小金井（サクラ）

小金井市には、名勝小金井（サクラ）と史跡玉川上水の２つの国指定の文化財があります。緑豊かなヤマザクラ並木と玉川上水の清流は、訪れる者の心を癒してくれます。特に春の壮大なヤマザクラと上水の景色のすばらしさには圧倒されます。

史跡玉川上水と名勝小金井（サクラ）の概要

玉川上水は、承応２年（1653）に造られた上水施設で、小金井を含む沿岸の武蔵野地域にあっては、上水からの分水が生活水として利用され、武蔵野新田の発展に貢献しました。竣工 350 年後の平成 15 年、国の史跡に指定されました。

小金井（サクラ）は、元文２年（1737）、幕府の命を受けた川崎平右衛門が、国内の名所からヤマザクラを取り寄せ、玉川上水両岸の堤に植えたのが始まりとされています。大正 13 年（1924）に約６㎞（小平市・小金井市・武蔵野市・西東京市）が国名勝に指定されています。

大正期のサクラ並木（現在の平右衛門橋付近）

サクラの衰退そして、復活に向けた取組

花見の名所である小金井（サクラ）は、江戸時代以来、国指定を経て昭和 30 年代までは、ヤマザクラだけの並木であり、林床は野草が自生する草地でした。しかし、近年、交通量の増加やケヤキ等の放置木の成長等、生育環境が悪化したことによりサクラが減少しています。指定時約 1500 本あったヤマザクラは一時、半分程に落ち込み、危機的な状態にありました。こうした現状を踏まえ、小金井市は平成 22 年度から東京都や市民団体と協働で、玉川上水の整備事業と共に小金井（サクラ）の復活も進めています。復活事業では、新たにヤマザクラを補いつつ、老木ヤマザクラの脇に後継のヤマザクラ苗木を植樹しています。植樹用の苗木は、市民団体の手によって丹念に育成されたものです。事業開始から７年が経過した現在、事業途中ながらもサクラは 900 本近くまで回復、市民団体の見守り等に支えられながら順調に生育し、綺麗な花を咲かせています。

今後の活用と継承

小金井市では、毎年春季に錦絵や古写真・絵葉書等の収蔵資料を公開する「小金井桜展」を開催し、市民団体では写真コンテストが行われる等、文化財保護の機運を高めています。小金井市の発展は花見時の臨時停車場（現武蔵小金井駅）設置が起因します。今後は、市の象徴でもある小金井（サクラ）及び玉川上水に関わる種々の文化財の調査を進めながら、後世へ繋げていくためにより一層の文化財活用を図っていきます。

老若が調和し多様な色彩を魅せるサクラ（整備後）

史跡玉川上水・名勝小金井（サクラ）
所 在 地：小金井市貫井北町・桜町・関野町・梶野町 他
アクセス：ココバス北東部循環⑬小金井公園入口すぐ
公　　開：通年
問合せ先：小金井市教育委員会生涯学習課文化財係
（電話：042-387-9879）
展示施設：小金井市文化財センター
電話：042-383-1198）
毎春「小金井桜展」を開催